板橋アートキャンプ2016

Itabashi* Art Camp
2016

Prologue

「板橋アートキャンプ２０１６」は、東京家政大学板橋キャンパスを舞台に二〇一六年六月四日・五日の二日間で開催されました。

本学造形表現学科学生を中心に、アートを体験し楽しむ手づくりのアートプロジェクトです。日頃の授業課題では、個人制作が多いですが、ここでは各人がやりたいことに対しチームを結成し、各プログラムとして企画運営、実現していくアートです。個の表現も大切ですが、ここでは個のエネルギーを結集し爆発させます。非日常のアートを楽しみます。

今年のテーマは〝ＬＯＶＥ〟です。〝ＬＯＶＥ〟は人にとって身近で欠くことのできないものであり、表現にとって、とても深いテーマです。これを今年は共通のテーマとし表現しました。

この親しみある奥深いテーマのおかげで、多くの表現が表れ、多くの人が参加できました。今年は造形表現学科だけでなく、サークルや他学科の参加も増え、表現形態も美術だけでなく音楽や身体表現も加わり、また、ヒューマンライフ支援センターの「森のサロン」の参加により、幼児教育の中でのアート表現も出現しました。ＯＧの参加も初めての試みでした。そして、一年生課題である基礎造形「風と遊ぶ」展示講評が同時開催され、板橋キャンパス全域が会場となりました。

アートキャンプは今年で五回目となり、年々拡大充実してきています。特に今年は酷暑の夏休みを避け、授業期間中に実施したので、附属中高生や他学科など多くの見学者に恵まれ、とても盛り上がりました。

今後の課題としては、拡大充実は良いのですが、その大変さのあまり形式化マニュアル化していく危険性も孕んでいます。いかに魅力的に充実させ、かつ創造的なプロジェクトとして継続できるかが課題と言えるでしょう。

このアートキャンプを通し、学生たちが人間として大きく育つことを期待しています。

また、この冊子も、この二日間の熱いイベントのドキュメントとして、冊子の編集方針からデザインまですべて学生たちの手により制作されました。ご覧あれ！

造形表現学科　学科長　手嶋尚人

CONTENTS

PROLOGUE

ライブペイント＜絵画＞ ・・・・・・・・・・・・・・ 4

楽焼き＜陶芸＞・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6

TOKYO KAFEI ＜Space Design＞・・・・・ 8

七宝farm ＜金工・ジュエリー＞・・・・・・・・ 10

しろくま＜インテリアデザイン＞ ・・・・・・・ 12

ORIMONO ＜織物＞ ・・・・・・・・・・・・・・・・ 14

ペーパーストーリー＜映像メディア＞・・・・ 16

colorful工房＜染色＞・・・・・・・・・・・・・・・・ 18

植物観察ツアー＜環境教育＞ ・・・・・・・・・・ 20

結城スペシャる＜児童教育＞ ・・・・・・・・・・ 21

本部 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 22
ステージ企画
ちょめとびも
森のサロン

広報 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 26

炊き出し ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 27

メイキングハート 記録 ・・・・・・・・・・・・・・ 28

写真コンテスト・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 29

ARTCAMP DATA

EPILOGUE

描

Show

ライブペイント

通常設営とパフォーマンスの二つの企画をした。通常設営では道に布を張りめぐらし、道の始まりから終わりまで虹色のグラデーションになるように描いた。パフォーマンスでは、参加者に鑑賞してもらうものと、ライブペイントに参加できるものを用意した。

▲森の小道いっぱいに広がってパフォーマンス

作品への愛を詰めた ラブロード

―LOVE―

時には一人で、時にはチームで、音楽に合わせてパフォーマンスをすることで作品に愛情が湧き、参加者同士、互いに愛情が湧く。描くことで関係性が生まれ、愛に通ずるのではないかと考えた。結果、どの作品も愛に溢れた作品になったのだと思う。

ライブペイントパフォーマンス大盛況

ライブペイントはスタッフや参加者の方と一つの作品を作り上げるところが最大の魅力。制作過程では大きく動きがあり、色彩も鮮やかで視覚的に派手で印象に残るのではないかと思う。

パフォーマンスとして参加者と一緒に作品づくりをする時間を設けた。子どもから大人の方まで安全に楽しんでアートを体験できるように、たくさんのビニール傘に色とりどりの花を描いていくパフォーマンスを企画した。誰にでもできて、一度に大勢の方々に参加していただけるような内容にした。

先生方や学生など多くの方々に参加していただき、お褒めの言葉をいただいた。計画の段階では何度も案を練り直し不安も大きかったが、自分たちとしても充実し満足できるものだった。

造形表現学科　三年　木村彩恵

色彩のトンネル

昨年に引き続き森の中でのライブペインティングということで、キャンパスに代わる支持体に何を選びどのように設置するか？を、四月から毎週のように打ち合わせを重ね、風が強かった場合への配慮など屋外での大きな作品の共同制作ならではの事前準備は、メンバーとの協力の大切さとともに、皆さんにとって今後どこかで役に立つ経験となったのではないでしょうか。

支持体に透明なビニールの部分を取り入れたり、着彩して頭上に水平に設置したアイデアは、画面を裏表から鑑賞できる色彩のトンネルのようでとても印象的でした。また、音楽を流しながらメンバー以外の参加者の方たちにも傘にペイントしていただき、自分たちで描いた作品上部に設置したコラボレーション作品は、単なるペインティングと言う枠を超えて、パフォーマンス、インスタレーション作品と呼べる領域にまで作品の意味が広がったように思えました。

このような機会を共有できたことに喜びを感じるとともに、アートキャンプに関わられた全てのみなさんに感謝しています。

造形表現学科　非常勤講師　萩原宏典

STAFF

教員	寺田和幸	萩原宏典
助手	小野寺光	舛井彩子
3年	木村彩恵	坂本真央
	副島幸恵	栗ヶ窪玖美
	梅澤月子	岸本花
2年	新坂瑞希	中野寛菜
	西川沙里	滝沢悠佳
	森本苑加	高林那奈
	望月春子	東太田鈴菜
	山本夏己	佐藤恵
	丸山紗英	山下志保
1年	外山晴菜	

陶

Workshop

楽焼き

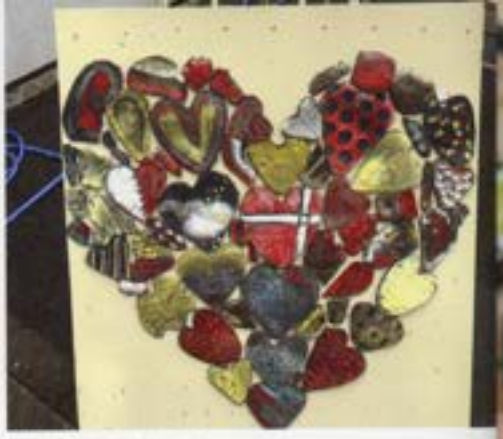
楽焼きではモザイクアートを制作した。参加者に絵付け体験をしてもらい、絵付けしてもらった作品を板に貼り付け、LOVEをイメージしたモザイクアートをアートキャンプ中に完成させ、展示した。

▲楽焼きしたハートに着彩

▲絵付けしたハート

こだわりのハート

▲焼き上がり



▲完成したモザイクアート

みんなで作る
楽焼きモザイクアート

―LOVE―

楽焼きプログラムのLOVEのイメージは、ずばりハートだ。モザイクアートの素材となる十センチメートル×十センチメートルの小さなハート型の素焼きをたくさん作成し、板の上に集め、大きな作品を制作した。参加者一人ひとりの作品が集まって、一つの作品となるところもLOVEだと思う。

従来とひと味違う楽焼きプログラム

私たちは絵付け体験で制作してもらった楽焼きでモザイクアートを制作した。準備段階では絵付けをする素焼きを約三〇〇枚用意したり、スタッフのみで楽焼きの試作会なども行った。

テーマがLOVEなので、素焼きをハート型の板状にすることで誰もが時間をかけずに簡単に絵付けができるワークショップとして実施できた。陶芸は小さい作品が数多くあるイメージがあるので、今回は他のプログラム作品に負けないようなハートが集合した大きな作品を作りたいという想いが強かった。

楽焼きは焼き上がりがどのような色になるかは窯から出すまでわからないので、焼き上がり後の鮮やかな色の作品を見てどんなモザイクアートにするか想像するのが楽しかった。

陶芸のメンバーはほとんどが初参加だったのだが、先生方と去年のプログラムメンバーであった先輩方にたくさんのアドバイスを受けることで準備もスムーズにでき、計画通りに物事が進んでいったように感じた。陶芸の技術や知識だけでなく、立場ごとにどう立ち回ればいいかなども学べ、個々の人間的な成長にもつながったと思える。

造形表現学科　三年　栗山万理子

楽焼きで"LOVE"

今年のアートキャンプの楽焼きチームは三年生が中心となり、スタッフ全員が一丸となってうまく役割を分担して作品を作り上げたのは賞賛すべきであろう。

やはり九〇〇度という高温の中の危険を伴う作業なので、事故が起こることが一番の心配事だが、最後まで集中力を途切らせないでチームワーク良く乗り切った。素晴らしい事だ。

ただ残念なことは最終的な出来上がりの構想が練り上がってなかったのか、一番肝心な焼き上がったタイルをディスプレイするところから、若干気持ちが離れて、結果的に完成度の低いものになってしまった事だ。楽焼きをあれほど頑張ったのに、結果を残せなかったのは何故かをじっくり考察して欲しい。

造形表現学科　非常勤講師　高田三平

STAFF

教員	加島さつき	高田三平
助手	樫本茜	袋井麻美
3年	栗山万理子	安田有希
	西郁美	新保みのり
	深尾瑞穂	
2年	松崎朱夏	吉野紗雪
	吉岡美緒	
1年	田中未歩	井桁純香
	加藤唯	

憩

Workshop

自然のLOVEを感じられる休憩所で、
木のコースター作りができる空間、
東京カフェイ！

TOKYO KAFEI

たくさんの草木に囲まれて、ゆったりと自然のLOVEを感じながらくつろげる休憩所と、
木のコースターに絵付けをするワークショップを提供した。
インテリアや装飾にもこだわり、リラックスできる空間をつくった。

▲準備風景

▲色を付けたコースター

▲白い布をかけ、柔らかな雰囲気をつくった空間

―LOVE―

私たちは自然のLOVEを感じられる空間を作った。もともと22号棟の隣のウッドデッキ周辺には、草木が多く、木漏れ日が注いでいる。その雰囲気を生かすインテリアや装飾をし、草花を植え自然の愛を感じられる空間によって自然のLOVEを表現した。

空間のアート！

スペースデザイン(以後SD)サークルによるプログラム、東京カフェイは、空間にこだわった休憩所とワークショップを提供した。休憩所には自然を感じ、安らげるようにするため花壇をつくった。白詰草やラベンダー、朝顔などの他に、野菜も栽培した。また、木の周りを六角形のベンチで囲んだり、正方形を階段状に繋げた形の棚や曲線が特徴的なカウンターテーブルなど手づくりのインテリアを設置した。紙で作った多くの蝶や花で装飾をし、天井には白い布を掛けて柔らかい雰囲気を目指した。

そんなのんびりとした空間の中で行ったワークショップでは、木のコースターに思うまま絵付けをしてもらった。一〇〇枚用意していたコースターも、たくさんの人に参加していただき、ほぼ無くなった。カラフルなペンキを使って楽しそうに塗っている姿を見て、準備した甲斐があったなと、嬉しくなった。

サークルでアートキャンプに参加したことで、造形表現学科以外の人もスタッフとして多く参加することができた。サークルの仲間と、鋸やシャベルを握って筋肉痛になりながら土を耕すなど、リラックスとはかけ離れた準備期間だった。しかし今まで使ったことのなかった工具に触れ、少し詳しくなり、仲間と空間をつくることでアートを楽しめて、お客さんにも楽しんでもらうことができた。アートは、どこからがアートであるか区切れないし、誰でも参加して楽しめるとてもオープンなものなのかな、と感じたイベントだった。

造形表現学科　三年　古屋真名

ゆったりとしたひとときを提供

アートキャンプでは二〇一三年より、一つのアートプロジェクトとしてカフェをつくっている。様々なアートが飛び交う中、ゆったりとしたひとときを提供するのもアートだ。アートキャンプの環境全体がアートの雰囲気に包まれるための重要な装置である。

SDサークルのカフェ参戦は二〇一五年からだ。SDサークルでは毎年秋の緑苑祭でカフェを開いている。その前哨戦として今年も「東京カフェイ」を開店した。今年は六月初め、梅雨前のとても気候の良い時期だ。花も多く咲く季節で秋の緑苑祭では実現しにくいガーデニングを重視した屋外で居心地の良いカフェとなった。隣接する憩いの広場での演奏やパフォーマンスを見聞きしながら、アートに包まれたひとときを過ごして貰えたのではないだろうか。

SDサークルはその名の通り、サークルなので他学科の学生や複数学年でのメンバー参加でできている。また、アートキャンプのための一過性のチームではないので、継続性という意味も有り、アートキャンプへの参加形態の可能性として多くのことが模索され期待される。

造形表現学科　教授　手嶋尚人

STAFF

教員	手嶋尚人		
3年	古屋真名	宮城明佳	谷ゆうな
	牧野佳奈	横山真美	関根麗奈子
	鈴藤日向子	春日里友	石井輝
2年	甘樂未帆	近藤咲耶	関千穂子
	逆井李奈	片野里菜	大田詩織
	藤間美紀	森田真悠子	鶴岡純くみ
	森繁聖	吉泉新花	鄭手洗里佳
	山口南風		
1年	豊田神	山崎穂菜	加藤唯
	高橋千奈美	保田鳳花	野田衣純
	中山佳織	南愛里	

七宝farm

ガラスの小さなお花畑

イタリア語で千の花という意味のミルフィオリを使った七宝焼き体験。丸く抜いた銅板の上にミルフィオリを並べて焼くだけで、世界に一つだけのブローチや磁石が作れる。
牧場のような温かい空間「farm」でワークショップを行った。

「LOVE」

「たくさんのミルフィオリの中から自分のLOVEを見つけ、銅板にLOVEな配置で、自分のLOVEが詰まった作品を作る」が金工でのLOVEだ。ミルフィオリを選んだり、参加者と協力して作品づくりに取り組む中でLOVEが生まれると考えた。

みんなの手元がお花畑になるまで

普段できないことを体験でき、完成した作品をお土産にして持ち帰ってもらおうと思い七宝焼きのワークショップを行った。

小さな子どもや初めて七宝を体験する学生にも、輪切りにしたガラスを選んでのせるだけで誰でも楽しめるミルフィオリの七宝焼きを行った。「ねぇ見てみて！」と自慢したくなるような作品を誰でもつくれる七宝焼きは、今回のLOVEというテーマにもぴったりだと思った。

プログラム結成当初のスタッフは五人しか集まらず不安でいっぱいだった。本部も兼任していたため、当日は少人数のスタッフでも運営できるよう、ワークショップを中心に構成を考えた。新学期が始まり、下級生にも声をかけて、必要な人数が集まった。

春休み中にテーマを決め、胎となる銅板の切り抜きを行った。本番までの二ヶ月間は「七宝farm」の牧場をイメージした空間に費やしてしまった。下級生のスタッフから「もっと金工らしいことをしたかった」という意見を聞いて、後輩の期待に答えられなかった自分たちを不甲斐ないと思った。追加メンバーとして集まってくれたことにとても感謝している分、残念でならなかった。きちんと七宝焼きワークショップのあり方から全員でコミュニケーションをとれなかったことを反省している。

それでも、たくさんの参加者が笑顔で帰っていくのを見ることができてよかったし、仲間と最後までやり終えたと思えた。自身としてはリーダーとしてのメンバーとの関わり方を考えさせられたアートキャンプとなり、人をまとめることの大変さを身にしみて感じることができた。

造形表現学科　三年　小林千紗

小さな感動を分けあうワークショップ

金工プログラムは、小さなミルフィオリを使った七宝焼き体験だ。ミルフィオリとはイタリア語で「千の花」という意味がある。一五ミリメートルほどの丸い銅板の上に小さなミルフィオリを数個配置して、七宝窯で焼いて一つの塊にする…だけといえば、それだけのワークショップであるが、赤く溶けたガラスは冷えて固まると鮮やかな花のような色と形が生まれる。そこには参加者とスタッフが共有する「小さな感動」が確かにあったのだ。金工スタッフは、二日間でいくつの「小さな感動」を共有できたのだろうか？

アートキャンプは年々、規模が拡大している。スタッフは、より多くの参加者に楽しんでもらうという目標を立て、それを立派に達成した。それはプロジェクト的には大きな成果だった。でも、アート・プロジェクトは、それだけでは何かが足りない。他者のためだけでなく、スタッフ一人ひとりにとっても重要な何かがあるはずだ。あっ、きっとそれはアートな「LOVE」に違いない。

造形表現学科　准教授　押元信幸

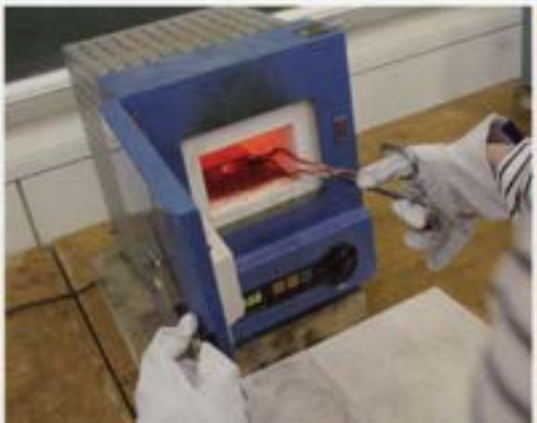
▲farmを表現した会場づくり

STAFF

教員	押元信幸	
助手	新後志穂	
3年	小林千紗	渡部友樹子
	尾迫里咲	竹本佳代
	高橋知子	日下部希季
	大野陶子	川岡琴衣奈
2年	佐藤恵	二上真由子
1年	田嶋愛美	本橋京香
	中野聡子	野原ひなの
	西村萌	橋橋澪

▼バランスを考えながらミルフィオリを配置する

▼800℃に設定した電気窯に入れて焼成する



▼完成したミルフィオリ

涼

Food

しろくま

しろくまではバニラアイスを提供し、小さなお菓子などで自由にオリジナルのしろくまの顔を作るワークショップを行った。また、アイスを食べて涼める休憩所としてペルペル人のテントをモチーフにした空間を制作した。

「LOVE」

それぞれがオリジナルのしろくまアイスを作ることで愛着を持ってもらうことがLOVEであると考えた。みんなで机を囲んでデコレーションし、テントで楽しく食べることで、自然と生まれるLOVEを大切にした。

アイスをデコレーションし、自分だけのしろくまを作って涼もう！

たくさんの可愛いしろくまができました

アートキャンプの参加者の活力となるものとして、アイスを提供することにした。たくさんの方に来ていただけるように開放感のある野外で行い、気軽に寄りやすくした。デコレーション用に色とりどりのチョコスプレーやキャラメルなどのソース、ドライフルーツなどを用意し、飾り付けを楽しんでもらった。

インテリアとして、大きなしろくまのテーブルとイス、アイスを配るための屋台、休憩所のテントを制作した。四月中旬にはデザインを決定し、四月末からひと月かけて制作をし、完成させた。当日は屋台の日差しが強く、急遽屋根を付けるなど、設置してからでないとわからないようなことにも対応することができた。

しろくまアイスは一日二〇〇食の予定だったが、晴天に恵まれたので、一日目に一五〇食を提供できた。二日目に用意していたデコレーション用のお菓子やソースが足りなくなり、追加で購入し、二日間で二五〇食を提供することができた。テントで遊べるように置いておいたホワイトボードには「おいしかった」や「ありがとう」などの多くの参加者の声が寄せ書きしてあり、やりがいを感じた。

造形表現学科　三年　二畑真美

ベルベル人のテント

棒を立ててロープで引っぱり地面に固定、布を掛けて左右に引っ張る。

ベルベル人のテントの完成だ。とてつもなくシンプル。だがその価値は絶大だ。分厚い布は灼熱の太陽から人々を解放し安息の「空間と場」をつくり出す。砂漠の民である彼らはその場で、熱くて甘いミントティーを日に何度も淹れる。究極の「お休み処」！今夏はそんな何でもなくて、とてつもなく深い空間づくりを試みたと言えよう。

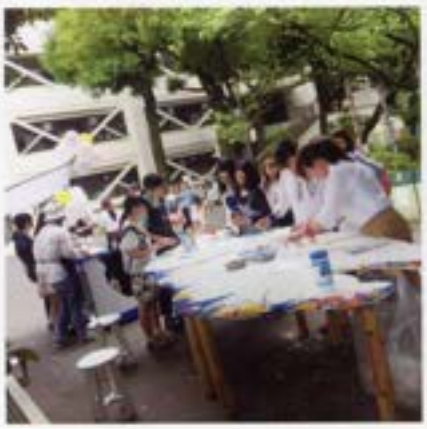
しろくま工削所は、初回のアートキャンプで豊田先生と企画。木工のワークショップとかできない？無心に木を削るとか良いかも？でもアツいよね～かき氷とかあるとイイなぁ。ついでに氷も削っちゃう？じゃあ、二つ合わせて「しろくま工削所」～という訳で、それはそれはゆるく始まった。今年はかき氷じゃなくて、アイスクリーム。ゆる～いしろくま君がたくさんできた。

造形表現学科　非常勤講師　加藤学

STAFF

教員	豊田聡明	加藤学
助手	福見さなえ	
3年	二畑真美	山谷まい
2年	津金里奈	本田幸

▼みんなでしろくま制作中



▼アイスを配るための屋台

▼ベルベル人のテント

織

Workshop

みんなで息を合わせて

ORIMONO

ヨーロッパの五月祭で行われるメイポール。メイポールとは春の到来を喜ぶ象徴として、背の高いポールにリボンを巻くことで装飾を施したものである。
今回は家にあった不要になった服や布をリボンにし、ポールの代わりにペットボトルを活用するなど、身の回りの愛着のあるものを利用して行った。さらに夜はライトアップをして幻想的な空間を演出した。

―LOVE―

身近にある古くなった服や布、ペットボトルを活用することで本来捨ててしまうものたちへの愛着や感謝をするという意味でLOVEを表現した。多くの参加者と協力して一本のメイポールを編み上げるということでも人と人との愛を表現した。

できあがったメイポールを木に設置

▲ 夜はライトアップで幻想的に演出

▲ 結び目の色とりどりのリボン

織ること

メイポールを織ることに欠かせないリボンは、参加者に愛着をもってもらえるように、身近にあった古くなった布や服を裁断し、柄同士の組み合わせを工夫して縫い合わせた。ポールの芯になる部分はペットボトルを縦に繋いで制作した。二リットルのペットボトルと、五〇〇ミリリットルのペットボトルの太さの違う二種類のポールを用意した。これらの作業は一ヶ月半ほどかかった。

スタッフのメンバーは三年生から一年生までおり、三年生が指揮をとって役割分担を行った。週一度の打ち合わせと作業を繰り返し行った。出席率が高く、制作していく中でチームワークがとれた活動を通して、協力する力・仕事を確実にこなすこと・問題解決へ積極的に取り組むことを学び、徐々に成長していったと思う。

私は下級生たちの様子を伺ったり、三年生のメンバーに協力してもらいながら指示を出したり、協調性や目標に向かってしっかりと計画を立てることを身に付けることができた。しかし準備段階から連絡や、指示がうまく下級生に伝わっていないこともあった。当日は一年生の授業があり、連携がうまくいかなかったことで、二、三年生の負担が多くなってしまった。積極的に下級生に声をかけて発言しやすい環境づくりをすればよかったと反省している。

当日は参加者の方から「楽しかった」「綺麗」「ありがとう」とお褒めの言葉や感謝の言葉をもらった。また一人ひとりが丁寧な対応をしたおかげで怪我やハプニングがなく、たくさんの子どもたちや、中高生や大人などの幅広い年齢層に楽しんでもらえた。織ることを通して自分の良い面も悪い面も見つめ直す良い機会になった。

スタッフとして参加したことは自分にとってもメンバー全体としても価値のあるものになったと思う。

造形表現学科　三年　松本静華

「輪・和・話」

一・二・三年生の合同チーム。打ち合わせ時間を合わせるだけでも大変でしたが、事前準備作業量の多いプログラムをよくこなされたと思います。初めましての挨拶の場は初々しく今でも感じ良く思い出されます。

リーダーを筆頭にチームを引っ張る三年生。一・二年生は上級生の指示を受けて、しっかり作業をこなす流れから始まりました。そのうちに、当日の実行アイデアに学年を超えて話し合う空気が生まれました。そうして各々納得したプログラムを最終的に実行できた経験は何にも代え難く、そこで培われたチカラは、今後の彼女たちの自信になっていくことでしょう。

造形表現学科　講師　荒川明子

STAFF

教員	荒川明子	
3年	松本静華	宮本さつき
	安田有希	広田明日香
2年	青木沙織	今村千秋
	大河原はる香	岡本夏希
	小竹美咲	
1年	関根瀬里奈	石沢優香
	高橋萌花	櫻井美希
	藤森彩水	牧野智恵美

映

Show

ペーパーストーリー

ストップモーションでおくる ハートフルストーリー

子犬が様々な困難を乗り越えて、忘れられたプレゼントを贈り届けるハートフルストーリー。ストップモーションムービーで1コマ1コマ心を込めて制作した。見た後に温かい気持ちになれる作品を目指した。

▼メインスクリーンの他に地面に投影した映像

「LOVE」

誰かのために一生懸命頑張るということは、その相手に対して愛情がないとできない行動だと思う。それがどれほど素敵でキラキラした感情なのか伝えたくて、今回はストーリー仕立ての動画で『LOVE』を表現した。

伝える難しさ

「君へ」は一日目の最後の夜にたった一回だけ上映した。みんなで同じ時間を共有して、私たちが表現した"LOVE"を感じてほしいという狙いからだった。

メインのスクリーンはできるだけたくさんの人に見てもらうためにプロジェクターを用いて屋外で上映し、大きな壁に投影した。メインスクリーンの周囲には小さいプロジェクターをランダムに配置し、地面に投影してより身近にストーリーに触れられるような空間づくりをした。

その結果多くの人が上映の時に足を運んでくれ、上映後は様々な感想が一帯を包み、私たちが目指した瞬間が出来上がった。

写真を繋ぎ合わせて動画をつくるストップモーションという方法を使って動画を制作した。私たちは四八〇枚の写真を、一枚一枚手を加えたので時間がかかり大変だった。苦労を乗り越え、伝えたかった"LOVE"を表現でき、そして完成することができた。関わったすべての方に感謝している。余談だが主人公の動物はアナグマでもなく、イタチでもなく、柴犬である。

造形表現学科　三年　恒川茉穂

▲主人公の柴犬

儚さと美しさ

空気、温度、湿度、匂い。風で揺れる木々、ざわめく声。上映開始時間が近づくにつれて、本番独特の雰囲気が会場に満ちていく。映像メディアを使った発表は、時間軸で展開するアート特有の儚さを伴うが、そのカタチに残らないがゆえの美しさを持っている。

映像メディアのプロジェクションによる作品は、演劇のように連続した時間の中に立ち現れてくるものだ。表現すること自体の意味や目的について、多くの時間をかけ思考し立ち向かわなければ、消え去っていく瞬間の連続の中に制作の意義を見出すことは難しいだろう。しかし、再現性が高いと言われる表現領域ではあるが、光である映像のプロジェクションが訴えかける創造性は、屋外会場での上映という一回限りの発表において、作り上げた映像コンテンツの再現のみで成り立つものではなく、集まる人々や、その場の様々な空気感など、複合的な要素により生み出されるものである。それゆえに、短いながらも共有される上映時間は、消え去る映像の儚さだけではなく、参加者それぞれの中に、様々な美しさを残しているように思う。

造形表現学科　准教授　兼古昭彦

▲一枚ずつ丁寧に撮影していった

STAFF

教員	兼古昭彦	
助手	洞之上明日香	佐波舞育
3年	恒川茉穂	佐々木柚夏
	染谷萌子	関根麗奈子
	相原祐香	栗原みか
	石井晶子	護見真智
	寺澤美月	塚本真由子
	大島遥	

染

Workshop

colorful工房

私たち染色プログラムは、二日間異なるワークショップを行った。一日目は布をタイダイ染め、二日目はたくさんのハガキにマーブル染めで装飾を施した。色とりどりに染め上がった作品は、展示用のトンネルを作って、その日限りの展示をした。

―LOVE―

数多くの色で自由に染色を体験することにより、自分の思う『LOVE』のイメージが徐々に明確になっていく。さあ、染めてみよう。

▲懸命に作業に取り組むスタッフ

頭の中で思い浮かべるだけでなく、躊躇せずにまず染めてみよう！

ドキドキハラハラのスタート

染色の醍醐味は、ワクワク感だ。染色はできあがりまでどんな色になるか、どんな模様ができるのかわからない。タイダイ染めは、模様をつけたい部分を輪ゴムや紐で縛ったり、割り箸で挟み、その上から染料をかける。マーブル染めの場合、細の上に染料を所々に垂らし、割り箸などで模様を作り、紙や布に転写する。最初に思い描いた柄を出そうとしても、できあがりは最後までわからない。たとえ全く異なった柄になったとしてもそれとして受けとめなければならない。

より多くの方が参加しやすいように、タイダイ染めでは染料を落とす作業をスタッフが行い、マーブル染めは短時間で染められるハガキを用いた。

二月の顔合わせのとき、三人だったスタッフは、最終的に他学年を含め十七人になった。三月にテーマをタイダイ染め、マーブル染めに決定し、四月下旬から試し染めを開始。五月中旬から本番を意識しながら染める。週二、三回昼休みや、放課後にメンバー全員で打ち合わせを行った。六月には展示するためのトンネル作成、チラシや看板作りをし、当日に備えた。

私はリーダーになったが、性格的に二人で黙々と仕事をするタイプのため、務まるのか不安だった。メンバーとの意見交換がうまくいかず作業が全然進まない時期もあったが、打ち合わせを重ね、みんなの意見を一つにまとめることができた。大切なことは一人で抱え込まず、仲間や先生の意見を取り入れることだった。しっかりとコミュニケーションを取る大切さを学んだ。

造形表現学科　三年　中村優花

何があっても大丈夫！

アートキャンプ二〇一六の染色プログラムは、タイダイ染めとマーブル染めの二本立てで企画しました。「二種類は厳しいのでは…」と消極的な意見も研究室のメンバーにはありましたが、学生の「やりたい！」との盛り上がりに押されて実現しました。

制作手順、展示方法などについて話し合い、さらに現場対応のシミュレーションをする姿勢には常に一緒に作り上げていくという意識が強く感じられ、大変頼もしく思えました。そして迎えた六月四日、「もう何があっても大丈夫！」訪れた人たちは笑顔、当人たちも笑顔で大変充実した二日間となりました。

造形表現学科　准教授　早瀬郁恵

STAFF

教員	安達晴子	早瀬郁恵
助手	澤村智奈美	藤田まりこ
3年	中村優花	金井萌
	中村光佳瑠	堀葵
	本田恵理佳	松本由佳
	山村花	
2年	加藤百華	小久保結
	塩谷里緒	須藤秋穂
1年	松澤栞	丸山千陽
当日スタッフ		
3年	飯沼珠美	宮崎菜湖
	高橋杏奈	

▲幼稚園児もマーブル染めを体験

▲タイダイ染めで染めた布を屋外展示した

植物観察ツアー

自然と触れ合い植物博士になろう！

環教は「自然環境」がテーマ！
緑豊かな家政大学の魅力を発信するため、王道の紫陽花や
ちょっと珍しいカルミア…などなど旬の植物を紹介するツアーと、
押し花のしおり作りを体験できるプログラム！

葉

Workshop

▲植物を使ってしおりを作っている様子

▲イメージキャラクター

▲植物などを並べてしおりを制作中

「LOVE」

「環境」から連想できる「緑」「自然」にはまだまだ私たちの未知で溢れている。「観察ツアー」「しおり作り」を通して身近な植物に触れ、花の名前を知り、実際に体験してもらうことで環境へのLOVEを表現した。

「造形」と「環教」の融合！

環境教育学科唯一の参加プログラムとして、家政大の自然を最大限に発揮できる二つのイベントを企画した。メインの「しおり作り」では大学内の葉や花を使うことで、身近な植物への関心を高めてもらった。このイベントでは制作工程を極力簡単にした。ラミネートは即席のシールタイプにし、子どもたちが自分でできるよう工夫した。また多くの子どもたちが参加しやすいよう、児童教育学科の学生に依頼して安全に活動できる体制作りをした。

私たちは二学科、二学年の六人と、ユニークなプログラムだった。初めましてのメンバーもいたが、それぞれが環境教育学科の描くLOVEを理解してくれたと思う。人に伝えることの難しさ、また大人数で同じ方向を目指すことの達成感を得た数ヶ月だった。造形表現学科のイベントであるため、最初はアウェーな立場と力んでいた。しかし一見すると対極にいる「造形」と「環境」が融合することは互いを理解する大事なチャンスであった。日頃経験できない刺激を受けることで自分の視野を広げることができ、恐れずにアートキャンプに飛び込んで本当によかった。

最後に、長期間準備をし、多忙な中サポートしていた本部の皆様には心から感謝の気持ちを伝えたい。

環境教育学科　四年　島田利奈

葉っぱは美しい

ぼくが生物を「好き」になり、のめり込んで研究対象として来たのは、生物が持つ多様な形態にある種の「美しさ」を見出したからだろうなぁと思うことがあります。キレイなもの好き。カミキリムシを見ても、クワの果を見ても、花を見ても、葉っぱを見ても、キレイなものです。でも葉の形などに意識してキャンパスを歩いてる人は少ない。変わった人か生物学者くらいのものでしょうか（もしくは少々変わった生物学者かもしれない）。

今回、生物多様性研究室の学生がアートキャンプに行って葉っぱの葉を作りましたが、葉っぱの美しさに造形表現学科のみんなが気づき始めたということですね（えっ？みんなこと前から知ってたって？）。

環境教育学科　講師　片田真一

STAFF

教員	片田真一	
4年	島田利奈	原澤香織
2年	三澤優里	小関晴香

飾

Workshop

結城スペシャる

大きく分けて二つの活動を行った。
1つ目はミロのヴィーナスの失われた腕作りだ。この腕はワークショップとして来場者の方に作っていただいた。2つ目はヒンメリづくりだ。
老若男女楽しめるフィンランドの伝統装飾をストローで再現した。

ミロを見ろ！＆ストローで簡単ヒンメリづくり

―LOVE―

アートキャンプテーマである「LOVE」にちなんで、「愛」の象徴ミロのヴィーナスを選んだ。腕は傘袋を使い、その中に息を入れて再現した。腕の中に愛のこもったメッセージを来場者の方々に書いていただいた。そんな願いをミロが叶えてくれることを祈る。

新しい発見

児童教育学科だからこそ子どもたちの心をくすぐるようなワークショップを考えた。ミロのヴィーナスの前に大きな鳥居が三つあり、くぐるとその先にお賽銭箱がある。神社のようにお願い事ができ、子ども心をくすぐる。ミロと鳥居、一見なんの繋がりも持たない二つだが、新たなコラボレーションを図った。お賽銭箱に集まったお金は、私たちの愛が届けられることを願い、東京家政大学のボランティアサークルに寄付した。

ヒンメリづくりでは赤いストローとモールを使った。五センチメートルずつ切ったストローの中にモールを通し、それを曲げて三角形を作った。さらにその三角形をいくつか作りうまく組み合わせていくと、インテリアとして飾れるフィンランドの伝統装飾が完成した。

児童教育は初めてのアートキャンプで連携がうまく取れないことが多々あった。作業の途中ではトラブルも多く発生した。準備が間に合わず授業時間外で当日のシミュレーションをした。そんな経験もいい思い出である。アートキャンプを通してゼミの中で団結力が生まれ、雰囲気が温かいものへと変わっていた。

造形表現学科の活動や作品に触れて、児童の造形について新たな発見や自分たちの活動を振り返り生み出せるきっかけになった。創造的な活動を行うことで他の人の違う発想や表現に触れることができた。それに刺激を受けて、自分たちだけでは見つけられないような可能性や創造力を今回の活動を通して得られた気がする。毎年こんなイベントが行われているのかと感動した。もっと多くの方に来場していただけると嬉しい。アートキャンプに参加させていただいたことに心から感謝したい。

児童教育学科　三年　鈴木輝実

表す、巻き込む…女神と観音様と鳥居

今回が本格的な参加となった「結城ゼミ」でした。参加者のゼミ生が表現者の専門家を目指しているというわけではないので、何をゴールにするか…。このようなイベントに関わることも初めてという、初めてだらけの素人集団でしたが、ミロに導かれて自分たちで創ったオブジェに参加して完成をめざすワークショップを考案しました。

題して「ミロを見ろ！」。途中からフィンランドクラフトの「ヒンメリ」も加わり、当日は充実した一日となりました。多くの参加者に恵まれ、ギリシャ女神と観音様と鳥居が見事に合体しました。運営にはなかなか参加できず、ご迷惑をおかけしました。来年もよろしくお願いいたします。

児童教育学科　教授　結城孝雄

STAFF

教員	結城孝雄	
3年	鈴木輝実	鈴木紗都子
	栗原夕里奈	庄子杏奈
	千田はるか	伊藤圭奈
	高橋遥	宇留野菜津

本部

Home

アートでLOVEを、LOVEでアートを

アートキャンプに参加するすべての人に、アートを感じてもらえるような全体的な計画と運営を行った。また、本部のプログラムとしてステージ企画や、アーティストによるパフォーマンスを企画し、学科の枠を超えて様々なアートを表現した。

「LOVE」

今回のテーマLOVEは様々な愛を表している。プログラム一つひとつがアートでLOVEを表現できるように本部はサポートをした。本部と広報で企画したスタンプラリーも、来ていただいた方が全プログラムを回りたくなるようなLOVEの表現である。

最後まで走り抜けて

本部は自分たちがつくりたいアートキャンプの形を企画・実施することができる。しかし、実現するためには各プログラムの進行具合の確認や会場準備、宣伝、当日を想定しての問題対策など隅から隅まで自分たちが動かなければならない。

本部四人だけでこなすのは大変だった。気の置けない仲間だからこその意見の食い違いや対立、段取りの悪さなどの壁にぶつかった。しかし一つひとつ乗り越えて、アートキャンプをやり遂げることができた。

これまで夏休みに行われていたアートキャンプだったが、今年は授業期間中に行われた。他学科の学生や附属の生徒などの来場者を見込んで、多くの人が参加しやすい仕組みを考えた。各プログラムにワークショップを積極的に取り入れてもらったり、スタンプラリーを設置することで全プログラムに参加したくなるような工夫をした。また、プログラムの中には環境教育学科、児童教育学科の学生が行っているものもあり、造形表現学科だけではできない様々なアートの形を表現できた。

本部のプログラムとして、二つの企画を立ち上げた。その一つがステージパフォーマンス系のサークルによるステージ企画だ。ヒューリッツが行っている森のサロンも同日に企画したので、子どもたちのために絵本サークル"くれよん"にも参加を依頼した。急な企画にも関わらず参加サークルの方々は快く出演依頼を受けてくれた。当日までリハーサルもままならない状態で本番を迎えてしまったが、素晴らしいパフォーマンスで来場者のみなさんにも楽しんでいただけた。

もう一つが造形表現学科卒業生の企画だ。ライブペイントアーティストである。ちょめとびも"さんにも参加していただき、二日間に渡って素晴らしいパフォーマンスを披露していただいた。

たくさんの新しいことに挑戦したため、当日までは怒濤の日々だったが、事前準備をしっかりしていた甲斐もあり当日は目立った問題もなく無事終えることができた。

本部は一番大変なポジションだと思うが、すべてが終わったときの達成感や楽しさはたまらないものだった。

造形表現学科　三年　渡部友樹子

たまには、違う角度から造形を経験する

アートキャンプ二〇一六は、開催時期を夏休みから通常授業中である六月の土、日に設定した。大学内の人の参加する機会が増えたことで、本部の学生達は、より多くの方に参加してもらえるように、いろいろと工夫や改善を試み、様々な問題を解決し、チームで動く難しさを乗り越えて、しっかりとやり遂げてくれた。途中で、何度も「私たちは成長できていますか？」と不安げに聞いてきたが、堂々と「アートキャンプは成功し、私たちは成長できた」と胸を張っていいだろう。昨年、二年生だった金工スタッフが本部スタッフを引き継いでくれたので、その成長ぶりは一番近くで見ていた私たちが保証する。さらに、スタンプラリー最後に特大の太鼓判を押そう。

造形表現学科　准教授　押元信幸

STAFF

教員	手嶋出人	押元信幸
助手	新後志穂	
3年	渡部友樹子	尾迫里咲
	小林千紗	竹本佳代

ステージ企画

来年は規格外で！

児童演劇研究会がアートキャンプに参加させていただき、二年目を迎えます。今年は、児童学科から二人、服飾美術学科から二人、造形表現学科から一人、計五名が参加し、傘をつかったパフォーマンスをやらせていただきました。

学生なりのスペシャルプログラムとして、ひと月近い時間をかけて創作したものだったようで、お客様の笑顔に触れ、力強い拍手をいただいたときは涙がこぼれそうになったそうです。これからも、ぜひぜひ参加させていただき、サークルの枠にとらわれない規格外のこともやってみたいと言っておりました。

児童学科　教授
児童演劇研究会　顧問　花輪充

ひとは、やはり自然に

ひとと自然との関わりは、ごく当たり前に語られますが、毎年、造形表現学科の「アートキャンプ」を見させていただき、いつもながら学生諸氏のひたむきな取り組みである金工、織物、陶芸などなど、自然からの創造物にやはり人と自然との関わりは素敵だと想えるのです。今年は「Jazz Live」で参加させていただきましたが、この音楽もひとの呼吸を感じてもらう行為ですので、まさに自然三昧でした。どうもありがとうございました。

教育支援センター・児童学科 教授
ジャズ研究会　顧問　筱井邦彦

LOVE × LIVE

テーマ『LOVE』にちなみ、愛に関わりのある曲やテーマの元となった曲などをギターの弾き語りで歌った。みなさんが手拍子をしてくれたり声を出してくれて、会場が一つになっているようでとても嬉しく思った。

シンガーソングライター
造形表現学科　三年　田代裕美

CAST

田代裕美
軽音楽部　13名
ジャズ研究会　6名
児童演劇研究会　5名
マンドリンクラブ　10名
フラダンス ~Pua Lani~　19名
絵本・紙芝居サークルくれよん　16名

①児童演劇研究会 ②軽音楽部 ③絵本・紙芝居サークル ④田代裕美 ⑤ジャズ研究会
⑥フラダンス ~Pua Lani~ ⑦マンドリンクラブ ⑧絵本・紙芝居サークルの組人形 ⑨見学中の子ども

白い油性ペンだけで描いていく

ちょめとぴも

2007年の大学2年生より活動開始
2010年卒業

ちょめ 岩崎佑香
××（チョメチョメ）のチョメが名前の由来。
文章を書いて、それを画に描いている。
ぴも 檜森文音
超芸術トマソンが好き。最近は暗渠巡りがマイブーム。

2007 ~Design Festahvol.26 ～ 32、37
2013 YOKOHAMA ART DEPARTMENT #03
他 多数

描き手とそれを観る人がビニール越しに向かい合う独自のスタイル。
パイプをくんで、ビニールをはり、ひとつの個室の世界を創ります。
ビニール越しの外の世界がふたりのキャンバス。
外の世界を人を、観察しながら、描きます。
その場で表現することにこだわります。
ふたりの中からあふれでる線で世界を人を浸食したい。

新しい時間

今まではイベントの開催の地で、その場の空気で感じたことや目の前の光景で観察したものが二人の中で咀嚼され、その時のテーマと相成って、ひとつの即興作品となってきた。今回は懐かしい場所への『思い出』と、年代は違う造形表現学科の後輩たちを見てふと私たちの中に通り過ぎる『時間』を新しく感じた二日間だった。私たちにも、後輩たちにも、先生方にも、どのような新しい事が待っているのか既に次が愉しみだ。

ちょめとぴも

変化の時

アートキャンプは五年目を迎え、変化を求められた。本部のステージ企画の話が進み、卒業生にもパフォーマンスをしてもらうことになった。そこで浮かんだのが、学生のときから変わらないスタイルで活動している、一学年下のちょめとぴもの二人だ。

アートキャンプの二日間、黙々と描き続ける二人に釘付けになっている学生を何人も見かけた。

賑やかで色彩豊かな数々のプログラムの中、寡黙な二人のモノクロの世界は新しい風を吹き込んでくれた。さて、来年はどんな風が吹くだろう……！

造形表現学科 助教 新後志穂

森のサロン

耳で聴いて心で聴いて感じた気持ちを描く会

板橋区から委託を受けて月曜～金曜の週５日、０歳～３歳までのお子さんを持つ家庭対象に開催している子育てひろば「森のサロン」。学生も学科を問わずボランティアで参加できます。また、月に一度、大学の広いスペースや緑豊かな環境を活かした『土曜日アウトドアサロン』を開催しています。

▲

▲上からの全体像

地域子育て支援とアートキャンプ

一年前、はじめてアートキャンプを訪れた際、"目でみて・ふれて・体験"できるこのイベントに子どもたちも参加できたらなんて素敵だろう！と夢みていたことが実現。卒業生の田口理恵さんを講師に迎え、音楽を聴きながら大きな空間を使い絵の具で遊ぶワークショップを行うことができました。

子どもたちはのびのびと絵の具の感触にふれ、学生さんは自由で豊かな発想力で親子に寄り添い、大人も子どもも心を弾ませ楽しみました。学生さんの展示やワークショップ、ライブなど盛りだくさんの内容を親子で体験できたことは子どもたちの記憶にも残ったことと思います。

ヒューマンライフ支援センター　保育士　清水幸

▼「どんなイロ？」「どんな感触？」絵の具で実験中

▼学生さんと子どものやりとり

VOLUNTEER

院１	中川鶴湿子	松澤綾子
３年	栗原みか	石井晶子
２年	府川園実	山口南風
	山本玲奈	青木沙織
	大河原はる香	
１年	市川温子	中山佳織

伝

Media

広報

アートキャンプのロゴ・ポスター・フライヤー・パンフレットの作成・配布、WEBの運営、総合案内スタッフ用に目印の缶バッチを制作した。本部・広報・記録のメンバーへ配布をし、当日は本部とのコラボ企画でスタンプラリーを行った。

魅力を「かたち」にする。

―LOVE―

参加者として、中高生や子どもたちでも親しみが持てるよう「元気でカラフルな色」を基調としたポスターやパンフレットをデザインした。人と人のつながりや、人それぞれ違う様々な感情を"LOVE"に込めた。

チームで築きあげていく。

広報は、アートキャンプ全体のイメージを多くの人に、目に見える形で魅力的に伝えることができる。パンフレットには各プログラムをよりたくさんの人に体験してもらうために、スタンプラリーを盛り込んだ。さらに地図とスタンプの台紙を同時に見て、位置が確認できるように工夫した。受付をしている際に、中学生がすべてのスタンプを押したものを見せにきてくれて、参加者の声を直接聞くことができ、アートキャンプそのものを間近に感じることができた。

作業は思うように進まないことも多く、メンバー内での話し合いや本部との連携が重要となった。中でもロゴマークとポスターのデザインは、テーマを理解した上でデザインを考えなくてはならなかったので、決定するまでに一カ月もの時間を要した。会議を何度も開いて密に連絡を取り合い、日頃からメンバーとコミュニケーションを図ることでしかわからないことが沢山あった。なるべく一人ひとりの意見に耳を傾け、たくさん意見を出し合うことで、よりよいものになっていくのが楽しかった。WEBなどの技術面では先生からのサポートも必要であった。作業を円滑に進めるために常に進捗状況を把握して、報告・連絡・相談し、スケジュールを調整することで、大変なことも乗り切ることができた。

この活動を通して自分も大きく成長できたと思う。当日に向けてみんなで協力し、最後に"かたち"となった時は、達成感と喜びで一杯だった。

造形表現学科　三年　金井萌

臨機応変な対応を楽しむ。

今年のアートキャンプは夏休みから前期期間中へ移動した。他学科学部や下位学年など他の学生を呼び込むことはイベントを充実させるために不可欠で、この変更には意味がある。必然、広範囲への告知を担うWEBへの期待も増す一方、時期が繰り上がることは先行せねばならない広報活動への圧迫も大きい。結果、デザインや制作規模の決定や変更に即断即決が求められるようになる。

今年のWEBの学生たちは、この臨機応変な対応を楽しんでいたように思えた。これはとても頼もしいことで、付き合うこちらも楽しかった。ありがとう。

造形表現学科　非常勤講師　宮本真帆

STAFF

教員	有馬十三郎	宮本真帆
助手	本橋真理	
3年	金井萌	高橋杏奈
	蓮見真世	恒川茉穂
	塚本真由子	鶴木玲那
	紺谷はるか	東海林亜希
	田上仁菜	
2年	片野里奈	小林ひかる
	飛澤優衣	三谷咲季
1年	萩原結	
当日スタッフ		
2年	榊真里奈	
1年	徳武加奈恵	吉川茉里

食

Food

炊き出し

炊き出し班は、造形表現学科の学生23名、栄養学科の学生2名で構成された。
アートキャンプの2日間、アートキャンプというイベントを楽しめるような食事提供を行った。

―LOVE―

スタッフが炊き出しの料理を食べて「おいしい」と思うLOVEや、大勢の人で料理を食べたときに生まれる空気感、笑顔もLOVEだと考えた。食べる相手を想い、懸命になって料理を作ることも炊き出しならではのLOVEだと実感した。

笑顔をつなぐ

一日目のメニューは縁日の定番、焼きそばやピザ、クッキー、豚汁にした。二日目は「同じ釜で飯を食べる」ということで大きな鍋で作ったカレーと、自分でトッピングとドレッシングを選べるサラダバーに決定！

造形表現学科の学生が主催するアートキャンプに、私をはじめとする栄養学科など他学科の学生が参加した炊き出し班。正直、アートのことはよくわからないけれど、忙しく働くスタッフに笑顔で炊き出しを食べてもらいたい。その思いから、みんなで手分けをして、慣れない大量調理に挑戦した。時にはあまりに食材が多すぎて鍋から飛び出しそうになるハプニングもあったが、笑顔で楽しく料理をすることができた。食券の代わりにみんなの腕に結ばれるリボンも、笑顔をつなぐものになったら、という思いで選んだ。

私たちが考えて作った料理を「おいしい」「たのしい」と笑顔で伝えることが、こんなにも嬉しいことだったのかと再確認できたアートキャンプだった。誰かの笑顔を作る、これも一つのLOVEの形ではないかと私は思う。一味違う方面からアートキャンプを楽しめる炊き出し班に、ぜひ一度参加してみてほしい。

栄養学科　三年　西村裕美子

学生の実践の場

平成二十四年度第一回アートキャンプより連続五回目の参加となりました。キャンプという閉わりから日常を離れた生活のペースを作るために、食事を提供し続けています。

今回もカレーを提供しましたが、今年はこれまでと違い栄養学科の学生リーダーがすべてのことを仕切りました。献立、食材選びと商店への発注、調理、配膳、後片付けなど。調理室と調理器具の借用は仲介しましたが、それ以外はすべて学生の手によるものです。

今後はもっともっと学生に任せてしまえるプログラムにしていけると良いですね。

また、栄養学科にとどまらずたくさんの学科の学生が継続し参加しているプログラムにならないかなと期待しています。

児童教育学科　教授　木村博人

STAFF

教員	木村博人		
3年	西村裕美子	飯島みゆき	小泉結佳子
	相澤光子	切留杏珠	高山佑子
2年	御手洗里佳	和田紗英	小野寺莉彩
	関根満里奈	菅野七生	完本知穂
	吉澤眞理	関根梓	
1年	深野冬帆	萩原麻由子	横山瑞季
	山崎夏澄	西原亜季	吉沢梓
	藤野葵	松本晴花	細野彩香
	仲原菜緒	深澤さやか	

食で伝える LOVEのカタチ

記録 Show

記録では各プログラムに担当を付け、準備期間から本番当日までの写真及び映像による記録撮影を行った。
また当日にはプログラムの１つとして、撮影した写真を使った立体作品制作や写真コンテストの開催、映像づくりを行った。

メイキングハート

―LOVE―

今回記録が撮影以外に行った作品制作である「making heart」でLOVEを表現した。当日撮影したアートキャンプの写真をあらかじめ制作したハート型のオブジェに貼り付けて、アートキャンプ全体のLOVEを目に見える形で表現してみた。

記録としての立場から

記録は、準備期間から各プログラムに携わっていくことで、その様子をプログラムの近い目線でアートキャンプを見ることができる。また実際に撮った写真や映像を使って、記録にしか作れない作品制作をすることで、他のプログラムでは味わえない経験ができたと思う。

アートキャンプの当日は記録として現場の写真を撮らなければいけなかったので、プログラムの企画は撮影して楽しめるように、撮ったばかりのアートキャンプの写真を使ったオブジェを制作した。それと同時に参加可能な企画として恒例の写真コンテストの応募を募った。

人の様々な感情や繋がりを表す「LOVE」がテーマということで、記録として各プログラムを撮影していき、様々な繋がりをレンズを通して強く感じられた。それは私たちが撮影した写真や報告会のために制作した映像からも目で見てわかると思う。記録は撮影や作品制作、写真コンテスト、映像作りなど、行うことが沢山あり、大変な仕事だったがみんなの努力やその成果を形として残すことができてとても楽しかった。最後にリーダーとして不束者だったが、メンバーのみんなに支えられて無事成功したことに感謝、そしてLOVEを。

造形表現学科　三年　山崎穂紗

カメラで愛を伝えよう

楽しい記録を共有する

記録チームはカメラや写真が好きな子たちが全プログラムを駆け回り、みんなの視点からアートキャンプを記録しました。最初は他学年の交流の薄さや情報共有の無さを感じていましたが、緊張した様子だった一、二年生も、三年生と一緒に大笑いをしていることがあり、機会を重ねるにつれて一つにまとまっていく様子が見えました。いつも違うグループで過ごしている学生同士が、短期間でチームとして動けるようになることにとても驚きました。一つの目的に向かって課題を共に乗り越えたという経験は、今後の力になると思います。

造形表現学科　助手　佐波舞音

STAFF

教員	簑古昭彦	
助手	淵之上明日香	佐波舞音
3年	山崎穂紗	佐々木柚夏
	平林凜	武井理紗
2年	小林麗佳	藤井春花
	野本結菜	御手洗里佳
	山口南風	鳥畑侑理香
	近藤紋	
1年	吉川栄里	徳武加奈恵

写真コンテスト

今年も行われた写真コンテスト。
色とりどりの写真が揃い、アートキャンプの時間を思い出させる。
各プログラムの準備や当日の写真とともに、アートキャンプを振り返ろう。

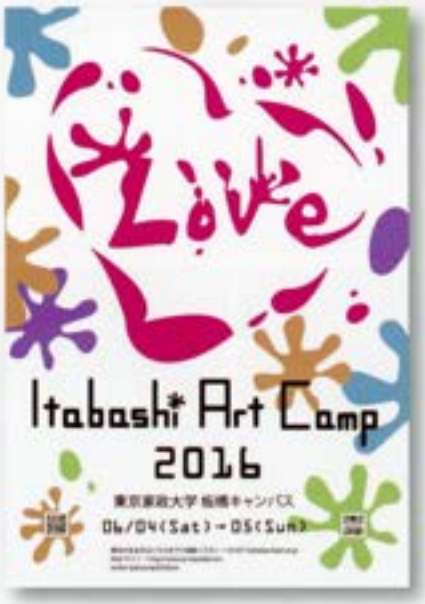
最優秀賞
造形表現学科 3年　松本由佳

ARTCAMP DATA

ロゴマーク

タイムスケジュール＆マップ

ポスター＆フライヤー



Twitter & WEB

スケジュール

12月	アートキャンプ説明会
1月	アートキャンプ説明会(プログラム決定)
3月	アートキャンプ全体会
4月	前年度本部からの引き継ぎ
	リーダー会
	アートキャンプスタッフ(最終募集全体会)
	会計会
	担当の先生と顔合わせ
	フライヤー入稿
5月	ステージ企画サークル集まり
	フライヤー着
	パンフレット・缶バッジ 入稿
6月	缶バッジ着
	ナナイチギャラリー本部展示
	スタッフ全体会
	パンフレット着
	ステージ企画リハーサル
	アートキャンプ当日

ミーティング

アートキャンプ当日までに、何度も繰り返し行われたリーダー会。アートキャンプはここから始まった。

6月30日に行われたアートキャンプ事後報告会。各プログラムがアートキャンプ当日の写真をスクリーンに写しながら、アートキャンプの2日間の報告と、来年度に向けたアドバイスなどを発表した。

スタッフ　総勢269名

造形表現学科
1年…37名
2年…63名
3年…79名
4年……3名

環境教育学科
1年……1名
2年……5名
3年……3名
4年……2名

児童学科
1年…10名
2年……4名
3年……6名

児童教育学科
1年……1名
3年……9名

現代美術学科
1年……3名
2年……2名
3年……5名

心理カウンセリング学科
1年……1名
2年……5名

子ども支援学科
2年……1名
2年……1名

教育福祉学科
1年……2名

短大栄養学科
1年……1名

栄養学科
1年……4名
2年……3名
3年……7名
4年……2名

短大保育科
1年……2名

英語コミュニケーション学科
1年……2名
2年……2名
3年……3名

現代美術学科
1年……3名
2年……2名
3年……5名

心理カウンセリング学科
1年……1名
2年……5名

子ども支援学科
2年……1名
2年……1名

短大保育科
1年……2名

スタンプ

アートキャンプ当日のスタンプラリーで使用されたはんこ
造・造形表現学科　3年　飯沼珠美

来場者数

2日間にわたるアートキャンプの参加者総合計数

6月4日　119名
6月5日　116名
計　235名

Epilogue

冊子制作を振り返って

今年の報告書は「シンプルクール」というコンセプトを土台に、全てのページの雰囲気、テイストを統一させ制作を行いました。

また、アートキャンプのテーマである"LOVE"を、各プログラムの漢字一画をピンク色にすることで表現しました。

制作はかなりハードなものでした。まず普段何気なく読んでいた雑誌がこんなにも細かく考えて作られていることに驚きました。そしてグループで作ることの難しさ、迫り来る期限に、何度も挫折しそうにもなりました。それでも喜びや達成感、爽快感の方が強く心に残っているのは、冊子制作において協力してくださった関係者の皆様、そして何より私のわがままに最後まで付き合ってくれた仲間たちのおかげです。

そんな様々な思いが詰まったこの報告書は、これまでの報告書とはまた違う良さの溢れる、かけがえのない素晴らしいものとなりました。反省点は山程ありますが、「無理じゃない？」を乗り越えたこの経験は必ずこれからの人生に役立つと確信しています。

造形表現学科　三年　編集長　山村花

▼冊子を制作したみんな

STAFF

教員	押元信幸	村田良子
	坂本理恵	
助手	新後志穂	本橋真理
	深山利実	
3年	山村花	松本由佳
	川岡芽衣奈	佐々木柚夏
	塚本真由子	恒川紫穂
	広田明日香	宮崎菜湖

板橋アートキャンプ 2016　報告書

編集	アートキャンプ 2016　報告書制作スタッフ
表紙	ちょめとびも
発行日	2016 年 12 月 13 日
発行所	東京家政大学　家政学部　造形表現学科
	〒 173-8602　東京都板橋区加賀 1-18-1
印刷・製本	株式会社エーヴィスシステム

Love

2016.06.04(Sat)~05(Sun)